２　次の文章を読んで後の設問に答えよ。なお、出題の都合上、一部原文を改変しているところがある。　　　　　　　　　〈長崎大〉二〇一九年度出題

　は常によみいでアらるる歌、いと遅吟にして、人のに行きて、むしろにのぞみてよまるる歌も、ある時はけふはよみＡ得ぬなりとて、ひねもす考へられたるままにて、①むなしくかヘらるる事たびたびなりき。文詞なども筆とられてより、いくたびか稿をかへて、猶心におちゐぬほどは、其ままのうちに巻き入れおかれて、心のおもむけるをりとり出しては、消しおぎなひなどせイられしこと常なり。されば、みづからゆるして清書せらるるにおよびては、誤れる事はをさをさなかりしなり。神主は、其こころおきて大いにことにして、早吟なるのみならず、序文など人にこはウれて②ものせらるるをりなども、筆をとりて紙にむかへば、詩腸たちまちに動くとて、案をも設けず、ただちに筆を下さエれしとぞ。秀才なる事はほめ聞ゆべき事なれど、さればこそ其文詞ともすれば考へたらぬ事の打ちまじるをりありき。又、あまり筆のはしるにまかせオられて、ふかく考へらるるまではなかりしことも有りしとＢぞ。

　今、いづれをかよしといはん。Ｃわが家の仏尊ぶにはあらねど、『俊頼口伝抄』にもいはれたる事ありき。其詞に猶うたをよまんには、いそぐまじきなり、いまだ昔より、とくよめるには③かしこき事なし、されば、などは歌一首を十日、二十日にこそよみ（　Ⅰ　）とあり。

　かくいにしへ人のいひおかれ（　Ⅱ　）を思ふにも、口ときのみすぐれたることとはいひがたかるべし。しかのみならず、たとひ筆とりて④すなはちなれる文詞なりとも、その時こそいちはやき筆づかひをほめて、いささかのあらむも、みゆるしてはめづべけれ、後世につたはり（　Ⅲ　）んに、誰かみる人ごとにむかひて、文は案をもまうけず物したるなり、さればいささかの疵はありぬべきことかとは、Ｄことわりいふ人のあらむ。其をりはたとひ千度ももたび書き消し書きあらたむとも、疵なき玉とならむには、後世につたはりて、誰人も⑤げにとめづべきものなるをや。Ｅ此おとりまさりいかにか有らん。世の歌人のさだめいふ所きかまほし。

（清水浜臣『筆話』）

【注】

吾師…村田春海。江戸時代の歌人・学者。

むしろ…わら・竹などを編んで作った敷物の総称。ここでは、和歌や文章を作る会の席の意味。

厨子…書籍などを入れる置き棚。

荒木田久老神主…伊勢神宮の神官にして歌人・学者。

詩腸たちまちに動く…詩腸は詩心。詩歌を詠む心の琴線にふれること。

『俊頼口伝抄』（としよりくでんしょう）…源俊頼著『俊頼髄脳』の別名。平安時代の歌学書。

問１　傍線部①～⑤の単語の意味を答えよ。

問２　二重傍線部ア～オの助動詞について、一つだけ他と文法的意味が異なるものを選び、記号で答えよ。

問３　空欄（　Ⅰ　）～（　Ⅲ　）には助動詞「たり」を活用させた形が入る。それぞれ適切な形に活用させよ。

問４　傍線部Ａ「得ぬなり」の文法的説明として最も適当なものを次のア～オから選べ。

ア　ア行下二段活用動詞「う」の未然形＋完了の助動詞「ぬ」の終止形＋断定の助動詞「なり」の終止形

イ　ア行下二段活用動詞「う」の未然形＋打消の助動詞「ず」の連体形＋断定の助動詞「なり」の終止形

ウ　ア行下二段活用動詞「う」の連用形＋打消の助動詞「ず」の連体形＋伝聞の助動詞「なり」の終止形

エ　ワ行下二段活用動詞「う」の未然形＋打消の助動詞「ず」の連体形＋断定の助動詞「なり」の終止形

オ　ワ行下二段活用動詞「う」の連用形＋完了の助動詞「ぬ」の終止形＋伝聞の助動詞「なり」の終止形

問５　傍線部Ｂ「ぞ」の下に省略されている語句を補え。

問６　傍線部Ｃ「わが家の仏尊ぶ」とは「わが寺の仏尊し」「吾が仏尊し」とも言い、ことわざである。ことわざの意味を明らかにした上で、本文において指し示す内容を説明せよ。

問７　傍線部Ｄ「ことわり」が指す内容を本文中から抜き出し、その最初と最後の五字を記せ。

◎問８　傍線部Ｅ「此おとりまさり」は、早吟と遅吟の優劣を指し示している。筆者の清水浜臣は、それぞれの長所、短所をどのように論じているか。百字以内（句読点を含む）で説明せよ。

問９　波線部「貫之」が編んだ勅撰和歌集、ならびに執筆した紀行文の作品名をそれぞれ答えよ。

【解答と採点基準】

問１　①＝なく（歌を詠まずに）　　②＝書き

　　　③＝上手な　　　④＝すぐに　　　⑤＝本当に（本当に素晴らしい）

問２　ウ

問３　Ⅰ＝たれ　　Ⅱ＝たる　　Ⅲ＝たら

問４　イ

問５　言ふ（聞く）

問６　Ａ「自分に関連する事物が最も優れていると思い込む」という意味で、  
Ｂ早吟の荒木田久老よりも、自分の師である遅吟の村田春海のほうが優れていると考えること。

Ａ・Ｂが揃っていなければ全体０。

Ａ＝４〔同趣旨の表現なら可。〕

Ｂ＝６〔荒木田より村田が上という意味になっていないものは０。村田が師であると書けていないもの、早吟遅吟の対比のないものは各減点３。〕

問７　此文は案を～べきことか

問８　Ａ早吟の長所は下書き不要ですぐに作品ができることで、Ｂ短所は考えの足りない箇所や間違いが混じることである。Ｃ遅吟の長所は誤りのないことで、Ｄ短所は何度も消したり補ったりするため完成に時間がかかることである。（99字）

Ａ＝２〔「すぐにできる」があれば可。〕

Ｂ＝３〔「考えの足りない箇所」「間違い」「誤り」などどれでもよい。〕

Ｃ＝２〔「誤り」は「考えの足りない箇所」「間違い」などでもよい。〕

Ｄ＝３〔「何度も書き直す」の説明がないものは減点２。〕

問９　勅撰和歌集＝古今和歌集　　紀行文＝土佐日記

【現代語訳】

　私の師（村田春海）は常に詠出なさる歌は、たいそう詠みで、人のところに行って、その歌会に臨席してお詠みになる歌も、あるときは「今日は詠むことができないのだ」と言って、一日中思案なさったままで、問１①甲斐なく（歌を詠まずに）お帰りになることが度々であった。（歌に限らず）文章なども筆をお取りになってから、何度か改稿して、それでもやはり納得しないうちは、そのまま書籍棚の中に巻いて入れておきなさって、気の向いたときに取り出しては、消したり補ったりなどなさったことが常である。だから、自分自身で（完成だと）認めて清書なさるところまで行き着くと、（内容に）誤ったことはめったになかったのだ。（一方）荒木田久老神主は、その心構えが（我が師とは）大いに異なっていて、早詠みであるばかりでなく、序文などを人に頼まれてお問１②書きになる場合なども、筆を取って紙に向かうと、詩歌を詠む心の琴線にふれるということで、下書きも用意せず、すぐに筆を（紙に）お下しになったということだ。才に秀でていることは褒め申し上げて当然のことではあるが、そのようであるからこそその文章はややもすると考えが足らないことが少々混じっている場合があった。また、あまりにも筆が（早く）進むのにまかせなさって、（その内容について）深く考えなさることまではしなかったこともあったということだ。

　今、（我が師と荒木田神主との）どちら（の態度が）が良いと言えばよいのだろうか。「わが家の仏尊ぶ」ではないが、『俊頼髄脳』にも述べられていることがあった。その一節に「やはり歌を詠むならば、急いではいけないのである。昔から今まで、早く詠んだ歌には問１③上手なものはない。だから、（紀）貫之などは歌一首を十日、二十日かけて詠んだ」と（書いて）ある。

　このように古人が言い残しなさったことを思うにつけても、口が早いのだけが優れたことだとは言い難いに違いない。そればかりでなく、たとえ筆を取って問１④すぐに書き上がった文章であっても、その時には素早い筆遣いを賞賛して、少しの欠点があったとしても、見逃して褒めてもよいが、（その文章が）後世に伝わったならば、いったい誰が（それを）読む人一人ひとりに向かって、「この文（章）は下書きを用意せずに書いたのだ。だから少しの間違いはあっても当然ではないか」と、理屈を言う人がいるだろうか、いやそんなことは誰も言うまい。その（書いている）ときはたとえ何度も何度も書いては消して書き改めるとしても、欠点のない素晴らしい文章となったならば、後世に伝わって、誰もが「問１⑤本当に（素晴らしい）」と褒めるはずのものなのになあ。この（速筆と遅筆との）優劣は（はたして）どうなのだろうか。世の中の歌人が判断して言うところを聞きたいものだ。